

特 116

430

清 駭 餘 響

完

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



友朋交好



大正十五年五月
 自
 仲濟

伯壽對松平直之



大正十五年五月
仲濟

伯壽對松平直之



融似三子或能示於瞻及北杜俱屬
外是似身不似毛足深論子孫多子
放似子賢亦來可立堂形似開學
不且博趨向正平論卒忠義交不必
研世道按物固慎持身宜就守兀儼為重
臣既學國計又牧斯民遠方特博少年可以為子究竟在
斯難在也臨孫子賢其神氣約復未得夫一髮一髮乃三子之真



既橋客舍奉送 藤森先生遊捺名妙義諸山

四方有志是男兒。竹杖芒鞋去向奇。可識從君過二野。

山川風物盡成詩。

雲山烟水入眸鮮。未合漫遊倦着鞭。杜宇聲鳴不止。

客中送客更悽然。

特116
430

清 駱 餘 響 緒 言

父祖ノ行狀ト遺文トヲ輯録シ、湮滅セザルノ方法ヲ講ズルハ、其孫タリ子タル者ノ當然爲スベキ事ト信ズ。大正甲子ハ恰モ祖父清駱ガ歿シテヨリ干支一周六十一年、父清彭謝世セシヨリ二十二年ノ星霜ヲ經過セリ。此間ニ於ケル世態ノ變化ハ、桑田碧海モタナラズ、恐ラク鬼神ト雖モ豫測シ得ザリシ所ナラン。況ンヤ凡人等ノ夢寐ニモ想到サゼリシ所ナリ。蓋シ祖父ノ時ニ於テハ開港鎖國、尊王攘夷ノ論議國內ニ充溢シ、王政復古ノ根底ヲ醸成セラレタル時ナリ。父ノ時ニ於テハ明治維新廢藩置縣、國家制度ニ大變革ヲ來シ、從來武士ト稱シ双刀ヲ帶シタル輩ハ、皆世祿世職ヲ失ヒ、傳家ノ寶刀ヲ市ニ鬻ギ、牛犢ヲ購フテ歸農



大正
15. 9. 29
内交

スル有リ、或ハ商賈ト爲リテ秤量算盤ニ親ム者アリ、其紛亂ノ狀、實ニ名狀スベカラズ。父モ其世波ニ漂蕩シ、農夫トナリ、里正トナリ、村夫子トナリ、轉々恰モ浮草ト一般ノ生活ヲ爲シ、僅ニ一家ヲ支フルヲ得タリ。不肖震太郎其ノ間ニ生長シ、刀圭家トシテ今日アルハ、全ク父祖ノ恩賚ト云フベキナリ。依テ父祖ノ行狀ト遺編トヲ輯録上梓シテ、知己朋友ニ頒チ、以テ父祖ノ苦心ヲ紹介スルト俱ニ、吾ガ子孫ニ對シテハ鑑戒ノ一助ニ供セントス、聊カ所懷ヲ記シテ序辭ニ代フト云爾。

大正甲子之春日

牧 震太郎 謹記

凡 例

- 一、本書ハ吾カ家祖、清暉翁ノ年譜ト其遺作ノ詩賦ヲ存置シテ子孫ニ示スヲ主眼トスルモノナリ。其ノ詩賦ハ嘉永六年翁五十六歳ノ時、自カラ一冊子ニ取纏メテ藤森天山先生ノ批閱ヲ獲タルモノヲ收メタリ。其後ニ在リテモ必ス相當ノ著作アリタルナランモ、更ニ存スルモノ無キハ甚タ遺憾トスル所ナリ。
- 一、天山先生ノ批閱ヲ經ル前ニ在リテハ、先ツ藩儒長野豊山先生及ヒ其ノ高足保岡嶺南先生ニ斧正ヲ請ヒタルコトハ、遺作ノ詩篇中ニ、往々之ヲ證スル言句アルヲ以テ推知セラルヘシ。
- 一、翁ノ年譜ノ編次ニ關シテハ高崎在住ノ早川圭村君ノ筆勞ニ負フコト頗ル多ク又詩賦ニ就テハ東京ノ文豪茅原華山君來遊ノ際、之カ一覽ヲ請ヒタルニ、君ハ更ニ台北ノ詩家魏清徳君ヲ推奨シ紹介ノ勞ヲ執ラル、因テ直チニ其ノ批閱ヲ請フノ榮ヲ得タリ。(又先人清彰遺詩ニ就テハ本書印刷ニ際シ、倉皇ニ東谷仙史田村君(前稿在住)ノ批閱ヲ請ヒタリ)是レ本書ノ刊行ニ就テ、永ク銘記シ且ツ感謝ノ誠意ヲ表スル所ナリトス。

大正十三年立夏之日

編 者 敬 識

牧清騷翁年譜

◎祖父 市郎右衛門

享保七壬寅年三月、川越藩松平侯ニ筮仕ス、祿二十石四人扶持、
同十四己酉年十二月、特ニ百五十石ヲ賜ル、殊勳アルニ依ル。

父 清房

通稱勇八、後ニ市郎右衛門

兄 清熙

幼名鎌五郎、後ニ外内、又只兵衛ト稱ス。

清騷

寛政十戌午十一月二十四日、武州川越丸馬場ノ家ニ於テ出生、母寺尾氏。字
三千、幼名金藏、後ニ遠里馬、與次兵衛、良右衛門ト改ム。良右衛門ハ藩主
直侯公ノ賜リシ所ナリ。

幼名清寅ト稱ス、天保十年ノ詩稿ニ騷ト署シタルアリ、而シテ嘉永末、安政
頃ノ上書ニ、清寅ト署名シタルアリ、思フニ騷ハ最初雅名ナリシヲ、後ニ寅
ヲ騷ニ改メ、清騷ト稱シタルナラン。但シ其改名ノ年度未詳。

(以下、享和ヲ經、文化九年ニ至ル十五年間ノ年譜ハ省略ス)

文化二年 癸酉	一六歲	十一月十一日、袖留日。二十四日元服、加冠竹田市郎右衛門、理髮見清熙。
一一 甲戌	一七	正月十二日、與力ニ被召出、御擬作五十石被下置。
一二 乙亥	一八	正月、通稱遠里馬ト改ム。
一三 丙子	一九	
一四 丁丑	二〇	
文政元 戊寅	二一	
二 己卯	二二	四月二十四日、屋代氏第三女ト結婚、五月御厩下市川氏宅借用、母夫人ニ從テ移住。
三 庚辰	二三	六月二十八日、母夫人逝去。
四 辛巳	二四	十二月中、屋代氏方ニ同居。
五 壬午	二五	六月長女澤出生。
六 癸未	二六	
七 甲申	二七	
八 乙酉	二八	

九 丙戌	二九	
一〇 丁亥	三〇	
一一 戊子	三一	
一二 己丑	三二	
天保元 庚寅	三三	
二 辛卯	三四	正月十一日、御番入被仰付、御擬作二十石四人扶持被下置、貳番ニ入番被仰付。二月十六日、藩校掌禮被仰付。掌禮ハ學術優秀、品行方正ナル者ニ被仰付慣例ナリ。
三 壬辰	三五	六月長男莊介出生。四月御厩下森本氏跡屋敷へ引移。
四 癸巳	三六	五月六日、藩校助讀被仰付。
五 甲午	三七	四月十六日、御前ニ召サレ學問別段出精ノ旨御意ノ上、葵御紋章上下拜領。
六 乙未	三八	七月次男健次郎出生。
七 丙申	三九	

八	丁酉	四〇	十月十九日、會所目付被仰付、前橋出張ヲ命セラレ。是ヨリ大半前橋ニ住居ス。十一月、大納戸奉行兼帶被仰付。此月蒙レ命祇ニ役上毛ニ途中作日、風吹落葉作牢晴。路入上毛景益明。奴僕多情就轎下。時々爲我説山名。現在ノ前橋ヲ知ツテ往時ヲ知ラサル者ノ爲ニ、詩中ヨリ其寂寥タル前橋ヲ抽出シテ紹介セン、「客中堪笑乏厨具。遣僕高崎買瓦爐」ト僅々タル器物ヲ購入スルニ、下僕ヲ高崎迄遣シタルナリ。
九	戊戌	四一	二月九日、前橋出張先ニ於テ類焼、四月七日、居宅モ亦類焼ノ厄ニ罹ル、出張留主中ナリ、宗家へ同居。
一〇	己亥	四二	此年ノ詩稿ニ牧暎トアレトモ、尙後年ニ清寅ト署名シタル文書アレハ、暎ハ雅名ニシテ實名ヲ清暎ト稱シタルハ蓋シ晩年ナラン。
一一	庚子	四三	六月家作出來移住。十一月長女澤堀江氏ニ嫁ス。
一二	辛丑	四四	九月阿澤離縁歸宅、十二月四方田均ニ再嫁。
一三	壬寅	四五	正月、與次兵衛ト改稱。

一四	癸卯	四六	六月七日、妻屋代氏死去、十二月高橋氏長女ト再婚。
弘化元	甲辰	四七	十二月三日、三男欽之助出生。
二	乙巳	四八	正月、妻高橋氏離縁。
三	丙午	四九	八月、客分ノ女、上州高崎ヨリ來ル、十二月妻トス。
四	丁未	五〇	十二月十日、四男留平出生。
嘉永元	戊申	五一	十月三日、次男健次郎死去、年十五。
二	己酉	五二	正月六日、長男莊介死去、年十九、二月妻離別。願ノ上、三男欽之助ヲ嫡男トス。十一月御旗本金田式部殿家來小林岩次郎厄介ノ女ト結婚ス。實ハ同藩大鹽惣太夫妹ナリ。
三	庚戌	五三	
四	辛亥	五四	
五	壬子	五五	
六	癸丑	五六	正月十一日、積年出精相勤候儀被思召、葵御紋章上下拜領。近年外國ノ船艦我カ近海ニ出沒シ、或ハ薪水ヲ乞ヒ、或ハ水兵ヲ上陸セシムル等ノ事アリ。

本年米國ノ軍艦、軸艦相衝ミ、相州浦賀ニ來リ、通商貿易ヲ求ム。幕府狼狽種々ノ手段ヲ盡シ、明年ヲ約シ歸航セシム。此年翁大ニ感スル處アリ、海防私言ヲ草シ、縷々數千言、海防ノ急ナル所以ヲ論ス、其ノ要ニ曰、言路ヲ開キ國民ノ輿論ヲ聞キ、海防ノ方法ト開國ト鎖國トヲ決定セントスル事、巨艦巨砲ヲ建造シ、水戰練習ノ急ナル所以ヲ説キ、且ツ其防備スヘキ地點ハ、内海ニ非スシテ相房ニ在リト主張シ、樞要ノ地ヲ相シ、水城ヲ築キ、防備ヲ嚴ニスヘシト説キ、又大木ヲ筏ト爲シテ房相ノ海口ヲ塞ク必要ヲ説ク。其言説スル所、頗ル詳細ヲ極ム。文中保岡嶺南翁ノ批評アリ、其卷末ニ、

忠肝義胆、使人懼伏。但惜語多意寡、有絮々煩燕之病。以愚觀之、刪棄多少、襯托問答等之語、獨存主意之所在、更整頓起結一二語、使歸乾淨清楚更妙、癸丑十二月嶺南學人孚。

藤森大雅先生ハ當時ニ於ケル宿儒ナリ、翁トノ交際ハ最モ親善ナリシト察セラル、今存在セル蒼龍館ノ扁額ハ、嘉永癸丑ノ年ノ揮毫ニカカリ其書體瘦勁天山平常ノ書體ト異ナルハ、特ニ留意セラレタル者ナラン。又別ニ小扁額ア

安政元甲寅

五七

リ、其ハ翁ノ詩ヲ和韻シタル者ナルガ、交際三十年ノ語アリ。之ニ徴シテモ其交際ノ尋常ニアラサリシヲ知ルヘキナリ。館ヲ蒼龍ト名ケタルハ、舍傍ニ老松アリシニ依ルト云フ。詩アリ左ニ録ス。

官舍有老松。字爾喚蒼龍。龍本百蟲長。爾亦百卉長。亭々凌霜雪。

寂々蟠巢穴。風雲忽乘時。誰與爭鴻烈。

川越人ニ聞クニ此松樹尙健在ナリト云。松樹若シ靈アラハ世態ノ變遷ヲ觀テ其感慨ヤ如何、切ニ聞ント欲スル所ナリ。

今回刊行セル翁ノ遺詩ハ、皆今年十二月、天山先生ノ添削批評スル所ニ係ル。此以後モ詩文有リシナランモ、一モ存スル無キハ、多大ノ遺憾トスル所也。六月十四日、五子寅吉出生。六月中、北久保町蟹江勘介跡屋敷ニ御振替被仰付、引移ル。七月、御勘定奉行被仰付、勤務中百五十石被下置。八月十三日直侯公御製封、公ハ水戸齊昭公第八子、幼名八郎丸。左ノ上書ハ年度不明ナルモ、君公御位ヲ繼キトアレハ茲ニ掲ク、且ツ署名ハ牧清寅トアリ、其概畧ニ曰、

一藩ノ弊風武技ノノミ傾キ、學問ヲ爲ス者ナシ、故ニ講學所ニ出席スルコトヲ命スルモ、僅カ三四ヶ月又ハ半年ヲ過キスシテ、或ハ怠リ或ハ止ミ、終ニハ廢學スルニ至ル、是レ偏ニ惡習ノ祟リヲ爲ス者ナリ。武藝ノ小技タルヲ知ラス、武藝ヲ知ラサレハ立身出世ヲ爲シ難ク、武藝ヲ治國齊家ノ具ト誤信スルコト惡習ノ根本ナリ、此ノ如ク誤信スルヲ以テ、先年長野友太郎(豊山)ヲ招聘シタルモ、長ク留マラスシテ去ルニ至ル、故ニ今日藩學ヲ隆盛ナラシメントスルニハ、水戸藩ニ於ケル朱舜水、備前侯ニ於ケル熊澤蕃山ヲ用ヒシ如ク、天下ノ碩儒ヲ招聘シ、君公、其人ヲ尊敬シ師事スレハ藩士モ從テ師事スルニ至ル、故ニ君公歸城爲シ給ハハ、總登城ヲ命シ、其ノ席ニ於テ治國ノ要ハ學問ニ在ル事ヲ諭サレ給ハバ一藩靡然トシテ學問ノ振興ヲ見ルヘク(下畧)其他枝葉ニ涉リ、懇切叮嚀ニ論議セラレタリ。此上書ノ全文ニ涉リ批判ヲ試ミ、其評言頗ル適切ナルモ、無名ニシテ其人ヲ知リ難シ、其卷末ノ評言ハ左ノ如シ。

此一書忠義慷慨、着眼不凡、可謂奇男子矣、可謂大丈夫矣。君侯果能用

二 乙卯 五八
三 丙辰 五九

之、奮然發大命、招鴻儒盡其才、則國風一新、天下歆美稱歎之聲、溢於耳矣。有忠臣如此、君侯豈忍負之哉。

二月十九日、出精ノ廉ヲ以テ葵御紋章上下拜領。

御勝手向改革即チ經費節約ノ儀ニ付上書ス、其概畧ニ曰、

總收入ニテ年々支出ニ不足相生シ、收支相償ヒ難ク、借入金其他種々ノ方法ニテ其年ノ收支ヲ合セ置クモ、年々歳々不足額増加シ、遂ニハ大破綻ヲ來スニ至ルハ、火ヲ賭ルヨリモ明ラカナリ、宜シク入ルヲ量リ、出ルヲ制スルノ方法ヲ設ケ、一ヶ年少クモ七八千ヨリ、一万金位ノ剩餘ヲ生セシメ萬一ニ備ヘサルヘカラス、其レニハ君公自ラ節約シテ標準ヲ示サレ、延テ一藩ヲシテ大節約ヲ行ハシムヘシ、且ツ役所ヘ及フ限リ併合シ、役員ノ淘汰ヲ行ヒ、非役閑散ノ者ニハ學問ヲ爲サシムヘシ云々。滔々數千言節約ノ方法ト、其レヲ斷行セサルヘカラサル所以トヲ論ス。

五月一日、次女千代出生。

七月十九日、御奉書到來、曰、其方儀存有之ニ付、前橋町在奉行、勘定奉行兼

帶、同所勝手方申付、高百石ニ成遣シ候、動中取扱大切之儀、入念可被相動候。八月十一日、舉家前橋ニ移ル。

參政ヨリ左ノ文通アリ。

其元此度前橋町在奉行、御勘定奉行兼帶被仰付候儀、深キ御主意有之、爰許與者別派ニ被仰付、其元一人エ御任被成候儀ニ付其心得ニテ諸事同所掛伊織殿要人殿エ相伺差圖ヲ請ヒ可被相動候、尤前橋役々之儀モ以來右之心得ニテ相動メ候様可被申付候。

- 一、前橋表之儀者、兩役所御合シ被仰付候間、左様相心得候様可被致候。
- 一、右ニ付、前橋表是迄取扱向之儀、其元へ引渡候様、町在奉行へ申開候間、引受候様、可被致候。

前橋表役所合併、兩奉行兼帶トナリタルハ、蓋シ經費節約ノ上書ニ、役所併合、役儀兼帶ヲ詳述セル結果ナラン。

勢多郡大島村ニ關口長左衛門ト云フ園藝家アリ、此人梨子ノ栽培ニ長シ、長左衛門ト稱スル梨子ノ良種ヲ發賣シ、世人ヨリ稱贊ヒラレタリ。翁ハ此

人ト最モ親善ナリシカ、或日同人ヲ役所ニ招致シ、種痘ノ必要ヲ説キ、孫女某ヲ武州中瀬川岸ニ同伴セシメ、種痘ヲ爲サシム。同所ニ種痘醫有リシ事ハ、川越、前橋間往來ノ時ニ認メ置キタルナリ。

又清寅ト署名セル上書アリ、其畧ニ、

頃日江都ヨリ講釋師ヲ招致シ軍書ヲ讀マシメ給フト聞ク、彼講釋師自身ハ御記録讀ミト唱フルモ、其實彼等ハ虛構ノ言辭多ク、小説的ニシテ正史ニアラサレハ、俳優ト一般ノ者ニテ、上流貴紳ノ近ケヘキ者ニアラサレハ、宜シク排斥シ給フヘシ云々。

又城外ニ目安箱ヲ出シ、下言ヲ求メ給フニ付上書ス、其畧ニ曰、

目安箱ヲ城外ニ出シ下言ヲ求メ玉フハ、一見良政ノ如キ觀アルモ、恐ラクハ上書スル者アラサルヘシ。眞ニ下言ヲ求メ給ハントナラハ、藩士ニ總登城ヲ爲サシメ、其席ニ於テ題目ヲ設ケ、御尋ネアルニ若クハ無シ云々。

前橋城再築ニ付上書ス、其概要ニ曰、

四丁巳 六〇

近年天下ノ形勢穩ナラス、幕府ニ於テモ未曾有ノ御改革ヲ爲シ、何時如何ナル事變出來スルモ計リ難シ、若シ江戸ニ事變生スル時ハ、川越ハ江戸ヲ距ル僅々十里、途中何等ノ要害アル事ナシ、前橋ハ江戸ヲ距ル三十里、西南ニ利根ノ大河アリ、北ニ赤城ノ固メアリ、沼田、伊勢崎ト平地相接シ、沃土富饒ナル上、前橋人舉テ移城ヲ渴仰シ奉ル、此機ニ於テ宜シク築城移轉スヘシト論ス、此上書恐ラクハ前橋城再築ヲ實現セシメタル基礎ナラン。

二月晦日、川越ヨリ御奉書到來ス、曰ク、其方儀思召被成御座、御附（君公）被仰付候、同役申合、萬事心ヲ付、入念可相動候、只今迄ノ席ニ被差置候、御役知勤之内是迄之通被下置候段、被仰出候。

轉任ニ付、重役ヨリ左ノ書翰到來、
一筆啓達候、御自分儀、御附被仰付候ニ付、御附金ノ外ニ、年々金拾兩ツ、御了管被成下候、恐々謹言。

二月二十九日

杉九郎右衛門克巳（花押）

牧 與次兵衛殿

前橋勝手方被申付シ兩名ヨリ、左ノ通申來レリ。

一筆令啓達候、殿様益御機嫌能被成御座、恐悅之事ニ候、然者御自分儀御附被仰付候ニ付、爰元勝手被仰付候、尤引越之儀者、追而可申達候、恐惶謹言。

三月三日

森田雄太郎正心（花押）

渥美源 五正視（花押）

牧 與次兵衛殿

跡役白井宜左衛門へ御用向引渡、四月三日出立、川越ニ歸ル、江戸御供一ヶ年詰被仰付、四月七日出立。五月中、兼テノ眼病白内障ニ相成、左ノ一目ヲ盲ス。

君公御年少ニ在ラセラレ、時々御戯レ相成リ、御近侍等ニ綽號ノ如キ名ヲ賜フ事アリ、或日與次兵衛、其方ニ佳名ヲ授ケント仰セラレケレハ、亦滑

五 戊午 六一

稽ノ名ナラント思ヒタルニ、其方ハ誠心誠意ヲ以テ予ヲ輔佐スルニ依リ、爾來良右衛門ト稱スヘシト仰セララル、依テ難有御受ケ申上ケ、其時ヨリ賜名良右衛門ヲ通稱トス。

眼病輕快ニ至ラス、療治ノ爲メ二月中御賜暇願上、二十日餘針療ヲ受ケタルモ快方ニ至ラス。此時療治御手當トシテ御手白ヲ金貳兩被下置、是レ異數ノ御待遇ナリ。四月十七日出立川越ニ歸ル。

眼病ナカラ又上書ス、其要ニ曰、

君公ノ行住坐臥ハ一藩ノ規矩準繩タリ、故ニ君公ハ一舉手一投足モ決シテ忽ニスヘカラス、宜シク古聖賢ノ教ヲ遵奉シ給フヘキ事ハ勿論タリ。治國ノ要ハ反身求心ノ四字ニ在リ、學問ノ正路ヲ得サレハ、邪路ニ陷ル、學問ノ正路ハ六經四子ニ在リ、漢士ニテハ黃老楊墨ノ學、治國ノ害ヲ爲スモ、我國ニテハ深ク憂フルニ足ラス、我國ニテ憂フヘキハ神道ト佛法ナリト指斥シテ其弊害ヲ説ク、頗ル詳カナリ、又君公ハ才氣ニ長シ給フ所ヨリ驕慢ヲ生シ、又奮發興起ノ心薄ク在ラセラル、ハ、大ニ惜ムヘキ

事ナリ、宜シク改悛アラセラレン事ヲ望ム、云々。

同藩士石井孝愛、翁ノ肖像ヲ描テ贈ラル、依テ保岡嶺南翁ニ贊辭ヲ乞フ、其贊辭ニ曰、

酷似三千。或謂未然。驪黃牝牡。俱屬外邊。似與不似。焉足深論。子之孫子。欲似子賢。愛慕所在。豈形似間。學不甚博。趨向正平。論本忠義。文不必妍。篤謹接物。周慎持身。宜起卑冗。儼爲重臣。既掌國計。又牧斯民。遠方特召。傳少年君。所以爲子。究竟在斯。雖然此幅。孫子寶旂。風神氣韻。縱未得天。一髭一髮。乃三千真。

邸學教授 保岡 孚

又自ラ家訓ヲ作りテ子孫ニ貽ス、其家訓ハ、

余欲爲子孫家訓、老將智而毫及之、又眼疾日甚殆盲、恐卒不能成編也。近日石井士敬、爲余畫小影、遂請嶺南先生得題辭、今併以貽子孫。題中先生目余以謹慎、雖不敢當、平生願學實在於斯、昔諸葛公之盛德、猶以此二字自居、然則爲余子孫者、繼述先志、服膺不失則足以修身、足以齊

六 己未 六二

家、足以事君、丈夫百行資焉有餘、因利此數言以換訓戒、夫古聖賢至言布在方策、日夜研究有以成就、所謂謹慎者、則余死之日、猶生之年也。

安政五戊午年秋七月日、牧清暎字三千、賜通稱良右衛門、時年六十一眼疾不勝、正月十七日御役御免相願、二月十九日願之通御免。是追勤務大儀ニ被思召、白鞘御脇差一腰内々ニテ御手許ヨリ被下置。大納戸ヨリ葵御紋御肩衣一、是迄學問御世話申上候ニ付、思召ヲ以テ被下置。六月朔日、欽之助袖留、十一日前髪、左司馬ト改稱ス、冥加トシテ御番相勤度旨相願二十七日願ノ通被仰付、一番エ被差加候事。眼疾御役御免トナルモ、君家ヲ思フノ情ハ猶禁スル能ハス、書ヲ山田參政ニ上ツテ意見ヲ述フ、其要ニ曰養君(直侯公)新ニ襲封セラル、モ、本藩ノ慣例ニハ未タ熟シ給ハサル處アリ、故ニ養君ハ宜シク實家ノ慣例ヲ脱シ、養家ノ慣例ニ移リ給フヘキノ秋ナリ。故ニ其ノ傳タル者ハ、君側ニ常侍シテ、進言スヘキノ要アルハ勿論ニテ、先ニ久永及ヒ迂老等其員ニ在リト雖モ、久永ハ知ラス、迂老ハ一モ其機ニ與ラス、默々トシテ止ミス、此ノ如キ時ハ上下ノ意思漸

萬延元庚申 六三

文久元辛酉 六四

二 壬戌 六五

三 癸亥 六六

元治元甲子 六七

次疎隔ス、宜シク鴻儒ヲ召聘シ顧問ニ備ヘ、其説ヲ聞クヲ可トスルモ、其人ヲ得ルト又食祿等ノ關係モ有レハ、先ツ保岡・杉村・兩人ヲ顧問ニ備ヘ、君側ニ常侍セシメハ、過テヲ補ヒ、弊風ヲ革正スルニ至ラン云々。

三月二十六日、町在奉行被仰付、勤役中百五十石ニ被成下御役料並之。通被下置候事。蓋シ眼病少シク癒エタルニ依リシナラン。

左司馬番代被成御免候事。

直侯公薨去。

二月二十六日、功勞ニ依リ左ノ通褒賞セラル。其方儀、前橋表御仕法替之儀相立候處ヨリ、同所取締モ相付、引續心配相勤、大儀ニ思召候、依之拜領物被仰付候様被仰出候。

拜領物 葵御紋小袖 一襲 白銀 五枚

九月十五日病氣ニテ逝去、川越町大連寺ニ葬ル。

法 諱 德 殿 院 道 倫 義 忠 居士

家督ハ左司馬ニ被仰付。

因ニ翁ノ子孫ノ畧系ハ左ノ如シ



清隸翁之逸事

翁ハ平素頗ル謹嚴犯スヘカラサルノ威容アリ、口ヲ開ケハ則チ忠孝仁義ヲ説キタリシモ、一面ニハ又仁慈愛憐ノ心深ク、特ニ友情ニ厚ク、他人ニ好事アレハ喜ヒ、他人ニ凶事アレハ哀ミ、不幸ノ朋友ニ對シテハ常ニ慰問ヲ怠ラサリシト云フ。年譜ニ漏レタル逸事二三ヲ掲ケ、茲ニ附ス。

一、君公(八郎丸直侯公)ハ身體小柄ナリシニ、翁ハ驟ヲ名トセルカ如ク(馬ノ高サ七尺以上ヲ隸ト云フ)大男ナリシモ、其拜領ノ衣服ノ如キハ其儘ニテ着用シ、決シテ仕立直シヲ爲ササリシト云フ。

一、翁ノ生母ハ、宇和島伊達侯ノ奥女中トナリ、樞要ノ地位ニ在リ、翁始メ生母ノ手元ニテ鞠育セラレタルカ、少年ヨリ武術ヲ好ミ、群童中一頭地ヲ拔キ、勇名高カリシト云フ。歳十五ノ時、即チ文化九年、生母中風症ニ罹リ致仕(致死後モ終身食祿ヲ賜ハル)川越ニ歸ラレタルカ、爾來能ク病母ノ看護ヲ爲シ、敢テ他人ノ手ヲ借ラサリシト。母ノ法名ハ曇華院妙闍日詠大姉ト稱ス。

一、翁ハ幼少ヨリ武藝ヲ好ミ、其技モ儕輩ニ卓越シタルカ、學問ハ好ム處ニアラサリシカ如シ。年三十二垂ントスル頃、感スル處アリ。晝夜孜々勉學シ、天保元年、年三十四ノ時、藩校ノ掌禮トナリ、越ヘテ五年ニハ助讀トナリ、終世書籍ト親ミ、學問ノ必要ヲ鼓吹セリ。

一、翁ハ平素嚴肅、行儀作法ヲ重シシ、家ニアリテ談話スル時モ、整然トシテ膝ヲ崩サス、病氣ニアラサレバ就寢スル時ノ外、横臥セル事ナカリシト云フ。

一、翁ハ資性祖先敬慕ノ念厚ク、吉凶禍福トモ先ツ祖先ノ尊靈ニ告ケタル後ニアラサレハ、敢テ家人ニ告ケス、故ニ御城ヨリ歸宅シ、直ニ祖先ノ靈牌ヲ拜禮スル時ハ、家人ハ何事カ吉凶禍福ノ事有リタルヲ知レリト云フ。

一、翁ハ頗ル書畫骨董ヲ愛玩セラレ、就中美麗ナル者ヲ好マレ、立派ナルモノヲ蒐集シタリシガ嘉永六年米艦浦賀ニ來航シタル時ニ皆賣却シ、其金ヲ以テ武器ヲ購入セラレシト。

一、翁平素ノ一舉一動ハ嚴肅其ノモノノ如ク、苟モ道ニ背キタル事ハ大嫌ヒニテ、假令親戚故舊タリトモ、背德ノ行爲アリタル時ハ假借ナク詰責シ、改悛ヲ表スルニ至ラサレハ止マサリシガ、一面又寛仁ニシテ人ノ過失ハ責メサリシト云ヘルガ、其一例ヲ舉クレハ、或ル日盛粧シテ前橋馬場通りヲ通行セル時、撒水ヲ爲シツ、在リシ男アリ、誤ツテ翁ノ頭上ヨリ其水ヲカケタルニ驚キ、彼ハ大地ニ平伏シ其無禮ヲ謝シタルニ、翁ハ我カ事ニ在ラサルカ如キ態度ニテ、平然トシテ歸宅セラレタリト。

一、翁ハ友情ニハ極メテ厚カリシカ其一例ヲ示セハ、朋友某(姓名ハ秘ス)ナル者、不幸癩病ニ罹

リ、平素交際セル者ト雖モ絶テ訪問スル者モアラサリシニ、翁ハ閑暇アル毎ニ訪問シ、不幸ヲ慰メ遣リタレハ、某氏ハ涙ヲ流シテ其ノ厚意ヲ謝シ、且ツ癩病ハ感染ノ恐レアリト云ヘハ、向後ハ無用ニセラレタシト謝シタルモ、其人ノ死ニ至ルマテ訪問慰藉セリト云ヘリ。

一、『年譜』安政三年、翁五十九歳ノ條ニ、武州大里郡中瀬川岸ノ種痘醫ノ事ヲ載セタルカ、其後調査シテ其種痘醫ノ姓名略歴ヲ知ルヲ得タレハ茲ニ記ス。

中瀬村ノ種痘醫ハ中川祐益ト稱シ、武州比企郡古里村ノ出生ニテ、本姓大塚氏ナリ、若キ時醫ヲ學ヒ紀州ノ某村ニテ開業セルニ、當時其近傍ニテ名ヲ知ラレタル小室醫師カ其門前ヲ通行シ、此所ニモ數醫者カ出來タト云ヒタルヲ聞キ、大ニ奮發シテ江戸ニ出テ、蘭法即チ西洋醫術ヲ研究シ業成リテ後、上毛沼田町ニ開業シ、其後澁川町ニ移リ、兩三年住居シタルカ、又同所ヲ去リ、中瀬川岸ニ至リ、土地ノ豪家河田氏方ニ寓シテ開業シ、長崎ヨリ痘菌ヲ取寄セ種痘ヲ爲シタルカ、初メテ接種ヲ爲シタル年度ハ知り難キモ、嘉永五年ニ種痘ヲ受ケタル人、今猶存在セリト云フ、其頃ハ種痘ヲ信スル人、否ナ知ル人サヘ甚タ稀ナリシニ依リ、進ンテ種痘ヲ請フ人ハ僅少ナリシガ、萬延年間頃ヨリ、遠近來テ之ヲ乞フ者多カリシト云フ、文久元年十一月八日家ニ病歿ス、年七十三、法諡權少僧都法眼祐益居士ト云、門下ニ河田元立ナル人アリ、中川醫師ノ歿後、世人漸ク種痘ノ効ヲ知リ

此醫師ニ就テ種痘ヲ受クル人モ年々増加シタリ。當時種痘料ハ一人金壹分ニテ、金壹分ハ金壹圓ノ四分ノ一ナレハ、今日ニ於テハ僅カナル金額ナレ共、其ノ當時ニ在リテハ相當高價ノ料金ナリシヲ以テ、河田醫師ハ僅々數年間ニ大蓄財家トナリシト云ヘリ。

清
駭
餘
響

清 騷 餘 響

上毛牧 清騷三千著

江戶藤森天山大雅 閱

丙申(天保七年)元旦試筆

城鐘聲裏捲書幃。占斷新詩對曙暉。小圃梅花香已動。東風吹送到柴扉。

尋 花

偶趁春風曉出家。一枝吟杖弄煙霞。尋芳胡蝶真吾伴。終日顛狂處々花。

詠 史

漫道相俱保富貴。同袍殘盡意初舒。龍行虎步真天子。豈料千年汚史書。

春日遊望

曳杖吟遊避世喧。郊頭十里逐春暄。疎林雨過稍添綠。
嫩草雪融初返魂。浴鼓聲傳烟外寺。酒帘影動水東村。
歸途清興猶難盡。松下徐敲月照門。
欲蹈野塘春色肥。新晴得夕出柴扉。柳邊拂笠風絲亂。
花下停筇雪片飛。已過河梁看魚躍。還尋竹院待僧歸。
歸來村口將求醉。恰有青旗閃落暉。

赴東都途中作

郵程百里踏春行。離郭猶聞城鼓聲。胡蝶紛紛爲我伴。
杖前輕舞弄新晴。
非暖非寒淡々風。橋窓看盡野花紅。春光到處皆詩料。
收入奚囊分寸中。

登愛宕山

二十年前來上時。山花歷亂海雲披。海光山色渾依舊。
不似人身有盛衰。

東都客中

一入江都弄物華。金城萬雉簇烟霞。小窓暫對城山月。
短艇新看墨水花。詩句略成慵上紙。夢魂不穩爲思家。
相逢舊識爭招飲。坐覺枯腸酒量加。

奉陪豐山長野先生在戶田君宅看櫻花

櫻花灼々爲誰開。照眼清光入酒杯。難得人來春正好。
臨風不覺玉山頽。

春日偶成

午鐘聲裏懶眠醒。靜對春風坐草亭。燕啄香泥營舊壘。

蝶追花片入疏櫺。吟成体倦初呼酒。浴罷身閒起步庭。宿雨全收晴色好。松根苔蘚一弓青。

春盡

蜂稀蝶散百花場。此際吟人正斷腸。雨洗殘芳林忽綠。風催薄暑麥將黃。從僧閑啜茶三椀。呼杖並携詩一囊。遣興消愁無若酒。醉歌夜月蹈晴光。

牡丹

天香國色擅豪華。獨殿群芳領物華。誇早杏桃爭得識。有斯大器晚成花。

初夏即事

雨後風林翠浪生。十分晴色滿城明。尋芳倦蝶漸無力。脫殼新蟬忽有聲。酒喚江村迎客飲。茶沽山市汲泉烹。

柴門寂々春過盡。閑看幽禽啄落英。

閒中富貴

門外喜無長者車。幽栖高臥意安舒。園因土沃宜移菊。池爲水深堪育魚。笕引澗泉供釀酒。窓懸山月每繙書。閒中逸樂今如此。不羨瑤階曳錦裾。

梅雨

黃梅已熟雨爲霖。門外新泥三尺深。茶摘家園呼婢製。酒沽城市共兒斟。兼旬壁濕蝸留篆。薄晚雲開蟬忽吟。宦事遊情都不管。閑身此際似投簪。

秋日郊行

閑携枯竹杖。秋景屬遊人。山淡渾堪畫。楓紅眞勝春。農歌迎月罷。漁笛入風新。吟興來無盡。尋詩立水濱。

冬景

傍水家々半啓門。午天曝稻逐晴暄。林疎半露栖禽影。泉澗高欹枯樹根。瘦馬帶烟歸古驛。釣翁擡笠入孤村。見他野徑繁霜上。八卦紋成履齒痕。

冬日望富嶽

突兀芙蓉誰得攀。萬年積雪敞雲間。天公傾盡銀河水。洗出千尋白玉山。

寒村雪意

寒村將雪噪林鴉。輕霰飄風粒々斜。七十老翁猶弄巧。樹頭縛傘護梅花。

雪中晚虹樓眺望

滿天飛雪曉寒加。裝飾山林一種花。不啻風光入吟料。

掬來玉屑可煎茶。

雪中尋梅

寒重四山雪。出門傍野塘。銀砂沒遊屐。竹杖掛吟囊。淺水橫斜影。細風繼續香。梅花共一白。何處不春光。

夜坐有感

此一首、管經
豐山先生削斧

夜來護凍一書帷。閑把詩編伴酒卮。山有奇容雪滿處。梅添逸韻月升時。松聲響枕茶湯沸。燈影搖窓烏帽欹。鬢着二毛癡益甚。狂奴故態未全衰。

雪夜

飛雪紛紛暮色晴。隨風旋撲細無聲。書窓不借膏油力。付與遙々一夜明。

雪江晚眺

雪壓松杉勢欲摧。銀屏深鎖玉崔嵬。寒鴉啼徹辭栖去。十里江山帶月開。

瓶梅

折取寒梅插得新。橫斜瘦影絕紅塵。花映書檠幾點雪。香飛竹案數枝春。似嫌路上乘軒客。閑伴床頭養懶人。芳姿玉骨長無恙。豈管簷前風雨頻。

歲暮書懷

一年如矢奈匆忙。吮筆挑燈坐草堂。松耐歲寒枝返綠。梅傳春信蕊含香。家鄰竹院幽林下。窓對板橋流水傍。枕上小屏難護凍。自斟濁酒洒枯腸。

丁酉(天保八年)元旦試毫

歲月夢中過。已逢四十春。梅香風裏發。柳縷雪餘新。

酒薄難成醉。心閑不厭貧。門前稀賀客。靜坐飽吟呻。

春日即事

微雨全收烟未消。花間香露綴瓊瑤。今朝快意知何事。催喚園丁分菊苗。

次杉村先生探梅韻

鏗然戶外屐聲輕。一碗先供茶味清。爲問西郊春已遍。梅花幾處綻新晴。

丁酉十一月、蒙 命祇役上毛、途中作

風吹落葉作窄晴。路毛入州景益明。奴僕多情就轎下。時々爲我說山名。

到厩橋、是日冬至、因作絕句

昨裝行李踏輕塵。忽過東寧川上津。偶值一陽來復日。

解鞍迎此異鄉春。

冬至後數日、快晴、暖甚。

數日快晴春意生。綿衣一領覺身輕。東風未至先消雪。

四面山々綠半呈。

客舍

遠離鄉國在毛州。寒夜吟詩猶未休。燈下結成花一點。

明朝果得雁書不。

夢中聞水車、有家園思

夜半風前響水車。夢魂彷彿似歸家。何知身是他鄉客。

一片旅愁燈落花。

偶作

身在他鄉少友朋。靜居偏似座禪僧。吟詩三昧誰相伴。

一點熒々殘夜燈。

怕寒未下讀書堂。唯待春光遍四方。自笑微官閑不乏。

吟身却是爲詩忙。

夢探梅花、醒有餘清

夢中得々步地傍。探討梅花轉徜徉。風叩寒窓衾被冷。

醒來枕上有餘香。

雪中望西北諸山

寒風吹雪裂肌膚。強啓窓扉擁茗爐。北是赤城西黑髮。

模糊遠影有如無。

風雪霏々旋入櫺。滿眸好景畫難形。天公却妬詩人看。

深鎖連山白玉屏。

出遊、奉次寒齋保岡先生贈良齋韻

破曉出家烟霧昏。手携藜杖與青樽。雨晴采藥旋山麓。日暖尋花究水源。村店啣杯題壁去。僧房乞茗對床言。客中貪盡閑風月。更向吟邊事討論。

余欲與桑原君結交、久而不遂、今茲余爲小吏、十一月祇役上毛、桑原君亦以其翌月來、官舍牆壁相接、日夜往來、劇談大笑爲樂、因賦一絕奉呈
名水從來風味殊。招君淪茗試芳腴。客中堪笑無厨具。遣僕高崎買瓦爐。
高崎去既稱三里許

戊戌天保九年歲首、在上毛作

祇役客上毛。索居乏侶儔。窓含遙嶺雪。門對大川流。梅綻知春意。酒酣忘旅愁。如何獨學陋。添歲益多羞。

午睡

孤坐看書日似年。倦來窓下枕肱眠。此中樂趣超凡俗。不是華山亦睡仙。

春夜

梅梢春月照書樓。疎影上窓清又幽。此景全同故園趣。却教旅客起鄉愁。

懿伯久永君、所寄元旦之作、有滿頭斑白猶孩笑、先把屠蘇壽二親句、覺深愛流露紙墨間、因賦一絕奉呈

白髮滿頭先把盃。捧親喜笑若童孩。多君大孝終身慕。真是今時古老來。

春日喜雨

春雨霏々細似毛。無聲潤物又如膏。看來麥隴風吹起。

十里原頭漲翠濤。
鳩聲呼雨晚絲々。官舍凭欄賦小詩。不獨村々農事可。
更憐恰及養花時。

二月二十七日、攝作事奉行、到森下長井小川、
田米野諸村、點檢土木之事、往來二十里、名山
大川風景甚佳

宿雨初收山鬱葱。日光忽動斷雲中。據鞍曉出北門去。
香露洒衣花上風。
溪流觸石響如雷。偶解吟鞍宿水隈。聞說寒威同北越。
晚春梅李一時開。
森下村旅舍

過沼田城一里、到戶鹿野、有橋不用柱、疊岩石
架木狀如梯、東寧川風景、此爲第一

一架危橋架大川。中央到得暫停鞭。急湍水落厓千尺。
馬駭逡巡不敢前。
併取溪泉與雪花。扇爐試煮故園茶。探囊訂句翻成笑。
馬上題詩字々斜。
長井小川田旅舍

三月九日、遊隆興寺、看櫻花、呈機外禪師
櫻花獨產我東方。美過海棠還有香。若使孟郊能到此。
春風走馬益顛狂。

到隆興寺途中
殘棋點々傍流家。冒雨衝風踏軟芽。爲厭市中喧雜處。
迂回取路去看花。

與石子蘭、神宮寺看花
紅杏白櫻相接開。花間携手暫徘徊。春光嫋々風吹早。

一陣芬芳撲面來。

十八鄉看梨花

千樹梨花渺不窮。輕筇步入白雲中。無端却憶坡翁句。

老我吟情愧未工。一樣梨花爛熳光。看來非靄又非霜。怪他三月陽春暮。

春夜聽雨

雪片飛時恰有香。春風吹雨撲精廬。一穗書燈對茗爐。知否平安明日竹。

美人睡起

園花尚有剩香無。夢覺花顏露未乾。鳳釵斜映玉欄干。睡餘倦意消無處。捲起珠簾看牡丹。

睡覺金閨對碧紗。多情占夢日將斜。欲排愁悶階前步。剪取池頭燕子花。

惜春

看盡番々節物新。杜鵑聲裏暗愁人。勿嫌秉燭花前醉。明日薰風不是春。

魁花堂三田村參政、坐事廢黜累年、起為奏者番、賦此以為賀

欲擬西山湖上亭。滿園無處不芳馨。終身欲結羅浮夢。也被東風吹得醒。

初夏即事

落盡春芳已沒痕。紅雲變作綠雲村。日斜湖面柳風淡。雙燕輕々蹴水翻。

林梢經雨綠方肥。裊々南風吹葛衣。一點春光未消盡。
 沙邊半架野薔薇。午夢醒來慵讀史。爐前閑啜露芽香。紗窓々外芭蕉雨。
 綠葉舒來三尺強。

感事

朝逢花發暮爲塵。前世尊榮後賤貧。萬事渾如磨上蟻。
 一番回了一番新。

移竹

琅玕移種綠成陰。瀟洒閑窓暑不侵。難得此君偕我隱。
 朝々暮々作龍吟。

漁父

移栽竹一叢。快受滿簾風。妙處無人解。新涼熟睡中。

扁舟載酒打舷歌。明月清風逸興多。世濁世清都不管。
 百年容我住烟波。

官舍雜詠

莫言爲吏苦憂貧。菜米油鹽亦足薪。案牘無多公退早。
 吟詩課史養心神。只待薰風期及瓜。一年小半不歸家。庭前節物慵看取。
 啼血杜鵑三兩花。

夏夜

炎威雨洗氣如蘇。不用殷勤倩竹奴。淡月微風涼意足。
 臥聞殘溜滴庭梧。

暑夜泛舟

今夜暑如烘。小池泛短篷。清涼別世界。滿袖藕花風。

孤舟破晚烟。移棹荻蘆邊。洗去人間熱。枕風抱月賦。
書懷

堪喜微官不乏閑。擁琴携酒醉溪山。漱泉枕石吟邊興。
多得清幽無事間。
晝睡同蠶日欲三。無多嗜好睡中貪。効君莫把當時務。
苦向人前捫虱談。

夏日田園

一夜風雷挾雨驕。曉來野水漲村橋。提籬皓叟農餘日。
伴着兒孫採菜苗。
農耕蠶事兩匆忙。男出鋤田女采桑。此際尤愁風雨惡。
家家簷插掃晴娘。

舍北晚桃

風掃烟雲雨乍晴。山明樹綠日將傾。天公揮起新圖筆。
一抹流霞染赤城。
雷雨建瓴濺屋牙。一川流潦浸鳴蛙。狂風忽地收雲去。
現出山東五色蛇。

扇面小景

青靄深籠岫腹。白雲橫繞林端。風光可愛愛如此。
吮筆何人倚欄。

夏日即事

柴扉常不啓。日夕只高眠。身滯赤城麓。夢歸河越天。松
濤翻茗鼎。榴火映書氈。獨坐閑無事。呼爲一味禪。
添閨今年夏尙冷。一簾風氣偏如秋。却看造物不違節。
隨候紅開山石榴。

既橋以夏至之日祭水神、蓋古禮也、公以郡奉
 行篠原某攝行禮、余亦與焉、時戊戌五月朔也
 掃地設壇刀禰傍。一杯清酌薦馨香。浮屠倩得行香火。
 猶爲後人存餼羊。

夢登榛名山

不勞双木屐。步履印苔痕。看霧生岩底。聞泉瀉竹根。
 爐墟仙客去。洞窈蟄龍翻。一覺西窓夢。羈栖官旅魂。

戊戌十月、再祇役到毛州、途中作

驛路輕塵趁馬啼。山重水隔日將西。偶然得句慵揮筆。
 催喚奚童代我題。
 旅愁寂莫向誰開。深谷驛樓啣一杯。夜半驚醒孤枕夢。
 風聲忽和雨聲來。

深谷旅舍

一年再渡東寧水。逆浪打舷魂欲消。漫々中流遙北望。
 赤城山下即前橋。五料關
 仲夏歸家冬又發。一年再作上毛行。曾遊山水非生面。
 相對馬前含笑迎。駒形驛

官舍漫成

下馬先安書一笈。小官無事閑爲習。催呼隣叟煮佳茶。
 因舊名川走僮汲。

冬野散步

打稻聲中日欲春。騎牛歸去斷橋東。江村木落上燈夕。
 隔水遙看數点紅。
 霜深野景寂。杖履倩童擡。山瘦看奇骨。林疎認早梅。
 風吹烏帽落。雨帶暮鐘來。炬火扶行步。東峯月未開。

偶步門外書觸目

寒風拂野欲斜暉。傍水家家半掩扉。忽有牧兒吹笛過。
驚他鷗鷺掠顏飛。
双眸窮處列雲山。一穗炊烟傍碧灣。風勁歸鴉飛不得。
斜追殘照沒林間。

枕上梅花

短屏不得護奇寒。花氣侵人夜未闌。風塢水塘乘月訪。
何如枕上伴書看。
愛翫梅花貯玉壺。此心自許比西湖。香盈一室夜忘睡。
爛醉耽吟抵死娛。

偶成

不慕神仙不學禪。南軒曝背正堪眠。從來此是吾家物。

玉殿朱門秘不傳。

執贄當時記事師。讀書辛苦半生涯。年來却怪疎慵甚。

日夕閑窓只課詩。

茅舍柴門枕碧流。門前謝客夜悠々。山僧趺坐言他靜。

把比吾儂輸一籌。

看書課了已三更。油盡寒檠欲失明。夜靜溪流觸石響。

聞來忽作鼓琴聲。

小寒前一日、微雨驟晴、步近郊

日暖雨乾嵐氣開。忽將濃翠染山來。綿衣藤杖快無限。
欲比春晴未看梅。
旅愁貧苦兩相投。試踏新晴作野遊。光景四時元不盡。
敗荷荒草亦風流。

擬 隱 逸

忘却利名同是非。生來疎懶世相違。有時溪上閑垂釣。要爲眠鷗煖石磯。

歲 暮 感 懷

四十餘年志未舒。鬢毛斑白手慵梳。壯心漸覺消磨去。嘆息今宵歲又除。

己 亥 天保十年 歲 旦

壯志爭衰六七春。鬢毛纔得數莖銀。不須隨世祝年忌。禱久一言書我紳。

奉 賀 常 星 保 岡 翁 八 十 八

莞爾童顏米字年。先生骨相本神仙。遙知介壽稱觴日。爲晉南山頌一篇。

身通醫術姓名香。八十餘年益健強。面映蟠桃紅灼灼。眼連秀竹綠蒼蒼。兒孫爭獻長生籙。仙客來傳不老方。特起成仁真國手。何須垂釣待文王。

書 懷

仙言不死只迷民。佛說未來何益今。惟願即時閑且健。名山名水飽行吟。身似北胡呼雁臣。年年路上踏征塵。人生百歲今強半。花柳故園逢幾春。

梅 花

梅花清麗出天然。不必東風着力妍。一事劍南遺恨在。當時枉作海棠顛。

春 日 漫 成

兩雪廢春遊。經旬不出戶。只怕後佳期。臥讀梅花譜。
 書照赤城雪。茶煎刀瀾水。柴門還晝掩。欲補五更眠。
 聞寒齋保岡先生遊東天台詩以寄
 天台結伴蹈烟霞。洞裏春風寂不譁。二月桃林實未熟。
 暫時相賞得還家。
 君在東都余野州。一封尺素寄悠悠。吉祥閣下花開日。
 恨不春風握手遊。

己亥三月朔、與石關子蘭、飯野玄謙、遊諏巷看
 桃花併序。

頃者石子蘭過余、約看桃花於諏巷、曰花期未至、至當相報、遂坐俟累日、寂然無聞、玄謙忽寄詩云、諏巷花將盛、余不覺拍案、屬子蘭誤人、徵玄謙花期且失、既思子蘭非食言者、盛開必來、玄謙將字、亦殆此意、居三日、子蘭果來、告以花期已至、因出示玄謙詩、謝曰、吾恐失花期、殆失子蘭、乃相俱一笑而出、到則玄謙早既具茶爐酒瓶、以俟其時、諏巷、桃林夾路、紅雲掩天、於是各舉杯賦詩而返、時已亥三月朔也。

簇々桃花處々新。隨流步入洞中春。此身幸喜無仙骨。
 不作胡麻一飲人。
 灼々紅桃傍水家。此中萬斛貯春華。如今自悔初心誤。
 不向東坡早種花。

去年仲春攝作事、檢土木、而行部今已周期、乃
 追記其事

雲山烟水弄春遊。時去星移忽一周。憶起田家投宿處。
 通宵枕上聽溪流。
 一周年又值花期催。憶自溪間躍馬回。最是山中奇絕處。
 千尋瀑布日邊來。

今年桃梨一時並開、口占出門、二絕句

桃是花紅梨是白。北紅南白兩般分。霎時風起吹將去。

片片翻成五色雲。
爛漫花光春滿川。桃梨一樣競嬋妍。天公自在神機手。
蜀錦堆中着楚錦。

奉次寒齋保岡先生遊東天台不見花而歸韻、
却寄

春麗東都百萬家。滿都士女弄春華。天台此日行香火。
堅鎖山門不看花。
禁勝高懸帝子家。洞門未許問韶華。春風蹄路空歸去。
不似孟郊看盡花。
却疑興盡到門還。惆悵天台咫尺間。皎々櫻花滿林雪。
不妨呼作剡溪山。

三月三日雨雹、村々麥苗殆盡、惘然賦此

昔日韓稜今不在。數郡災變柰容消。可憐蜥蜴口中水。
結作大珠枯麥苗。

漁樵對話圖

釣魚南浦月。伐木北山風。莫問生涯異。惟應隱逸同。

客舍春日、寄久永松陵

昨夜山中暖氣勻。柳眉梅額一時春。滿頭斑白君看取。
纔得東風色倍新。

客舍聞歸雁

不是迢々萬里征。春風異土豈無情。寄言雲岫北歸雁。
莫向孤窓宿處鳴。

移梅遇雨、喜而賦

官庭移種半窓梅。留待香風撲面來。難得如膏一夜雨。

明朝定見十分開。

酷愛一株香。移從山水鄉。滋培春雨力。細々洒昏黃。

丙午罷上毛官舍觀中村氏所藏鷹圖、相傳爲

故廐城壁上之物、臨城廢後、剪裁作幅

松葉翻飛風氣腥。待哺雛子競相鳴。九天影落林禽裂。

四野聲喧草木驚。孟子取爲苛政喻。季孫假做去邪名。

當時貼在城中壁。遺愛于今憶舊情。

讀山陽先生詩集

咳唾作珠聲作雷。網羅今古入詩來。私言造物有偏愛。

枉賦山陽八斗才。

居然談笑採雄麾。變漢說和多出奇。叱咤千軍人破膽。

太平三百一男兒。

讀遠思樓詩集

取來牛耳海西濱。求巧探奇字々新。讀了燈前仔細品。
今時關左覺無倫。

春日携友人、過小出村、訪藍澤氏

疊石屋東成小坡。櫻紅柳綠好交柯。主人學得香山趣。

暮雨朝風這裏哦。

午後新晴好。行吟烟靄中。竹林日吞吐。村落水交通。

酒映前山綠。花添夕照紅。惟應詩雅致。不必句求工。

遠藤氏贈盆蓮、賦一絕作謝

酷愛蓮花不染泥。賞心豈敢讓濂溪。芳姿帶月窓前立。
勿謂佳人伴我閨。

悼藍澤生並序

小田村藍澤生，躬勤農桑，孝友惇篤，有君子之風，而旁志於學，又好文詩，余祇役于厩橋，生來質疑，或論文詩，歷々可聞也，如斯者數歲矣，去年十月余竣役，告別以歸，十一月生歿訃到，余聞之怆然，慨嘆殊甚，今茲余復祇役于厩橋，忽值一周之忌辰，輒然有賦。

日々荷鋤夜讀書。吟詩寫字共農餘。天將歲月假斯字。定听聲名轟里閭。聞道名山與靈水。其間秀氣必生奇。赤城屋肖東寧面。果見偉人天豈欺。

弔藍澤氏墓

夢裏光陰忽匝周。如何造物奪吾儔。吞悲薦墓一杯水。即是生前獻與酬。誰言鶴唳遠聞天。吾恨綿々徹九泉。屈指期年如昨夢。

墓前血淚落漣々。

敝廬小集，奉送保岡先生遊上毛，探韻得龍字。吟筇此地暫留蹤。又去毛州探萬峰。今日敝廬離別酒。酒邊下物只箏龍。

庚戌嘉永三年冬，余在上毛官舍，患咯血，季姪自河肥

馳書訪病，且寄詩，次其韻却寄

雁信封開初夜天。結花燈火吐青烟。暫時示疾汝休悶。擬逐病魔新逐年。

辛亥嘉永四年元旦，在上毛

五旬加四又迎春。自賀今朝脫病身。柳着東風舒媚眼。梅含殘雪啓香唇。客中獨酌屠蘇酒。案上新除筆硯塵。漫道平生惟守拙。詞場豈肯後同人。

官舍庭中、有手種梅樹、每遇花期、值余不在、今歲辛亥花開、從容晤對、狂喜賦此

梅樹移從山水鄉。丁寧培養半年強。每逢花日余歸去。孤負枝頭數點紅。東風吹暖數回春。空想枝頭夢破新。爾不負予予負爾。久無詩句慰花神。爛熳庭梅占歲華。紙窓淡月影橫斜。牧郎雖去亦時到。不是玄都觀裏花。

題諸田子蘭村居圖

山村漢々淡烟橫。知是高流隱姓名。雲自榛名峯上到。人從三國道中行。青松繞戶真堪撫。綠水護田正可耕。料想鳴琴孤鶴夜。清風爽籟一時生。

蓬戶柴門畫不開。長松送翠入窓來。數家村落共寒井。幾處藩籬多古梅。洗硯前溪思後句。弄花舊砌煖新醅。此中著個清貧者。却富床頭書一堆。十畝桑田一畝宮。茶烟細々柳梢風。讀書聲絕午間寂。小律推敲方寸中。人海波瀾艱又艱。掉頭去々住仙寰。爾來不入城中久。知是今時小丈山。一道溪流蘸晚霞。巖頭占座拂莓苔。問君罷釣歸何處。遙指蒼茫松底家。

次諸田子蘭韻

抱病春來不接人。爐傍調理藥君臣。官閑偏愛吟詩好。畢竟生涯是逸民。

伯姪奉行某、役滿歸、置酒作別

一樽離別酒。分袂不須嗟。微雨松添綠。惠風梅着花。幸吾漸免病。喜爾遠歸家。指日高堂上。團欒笑語譁。

奉次寒齋保岡先生見寄韻

乘晴出郭去。春暖人輕裘。漁艇繫橋脚。酒錢懸杖頭。行雲多靜意。歸鳥促羈愁。回首望天外。遠山認武州。懶意閑身稱半仙。擬休火食計延年。竹竿蒻笠苔磯坐。柳絮追風舞眼前。

過久永郡宰宅、得絕句

濺々春流繞砌清。掬來煮茗解餘醒。有時睡起還高枕。聽作風聲又雨聲。

觀石川丈山翁墨蹟、有感

筆力精神無俗紛。看來便識絕人群。風流文雅真餘事。胸次包藏十萬軍。

比叡山南鴨水傍。假仙自喚讀書堂。胷中豪氣詩端迸。海內英名筆下香。大雅文章閒外適。悲歌絲竹醉餘狂。誰憐沈晦烟霞者。者操曾爭日月光。

春郊觸目

嫩日輕風雨後天。山村花柳暖生烟。牧兒罷笛眠牛背。斜帶夕陽過小川。榛名峰對赤城山。一道東寧在此間。日夜洋洋流不止。八州以北是天關。上毛沃土異他鄉。麩麥收來乃插秧。憫笑慵農懈生理。年租酒債買金償。

餘 卷
六四
構堰刀寧分水流。濺來各處溢田疇。封中萬戶不知旱。真是關東第一州。

韓文公

一卷封書奏闕廷。憲宗佞佛竟難醒。棄身行道吾儒事。豈怕區々遷謫刑。泗洙淵源早着鞭。揭來日月再中天。誰言千載不傳學。看破遺經得力研。

讀虞初新志、稱佛教者多矣、戲作絕句、爲後讀者、加警誡

非迷佛教迷情慾。信道終身不肯篤。宇宙清明日月光。他方何用加蛇足。我朝帝子漢天王。蠹入腹心俱病狂。一自人間流此毒。

生靈億萬溺洗洋。

周武奮然排佛家。英風剛氣溢中華。當時能遂其初志。天下至今無怨嗟。

客中偶作

飽富三餘却苦貧。自貽人事有前因。窺閑飢鳥來求食。貪暖懶貓徐睡茵。駐客圍棋消永日。穿庭種竹適吟身。春陰向晚欲成雨。催喚僕童教貯薪。廐城之北大川東。此裏栖遲一老翁。迂拙難供今世務。苦辛欲逐古人風。看書眼領素封富。泥酒身忘瀕死窮。孤枕蕭々眠不就。夜窓月暗聽歸鴻。

先主訪茅廬圖

從來伊呂匹。欲與老農終。呼起臥龍睡。風雲冲碧空。

題畫

竹樹幽堪入畫。溪橋斜似飛虹。斷巖峭壁途絕。
中有垂釣老翁。
山高水隔烟橫。茂樹蕭森月明。有味倚樓夜靜。
時々聽讀書聲。
雨後山林淡烟。歸鴉一角遙天。無風水面如鏡。
落日橋頭繫船。

春郊行

探詩山北到村東。楊柳風吹醉頰紅。怪底遊魚忽驚散。
不知我影墜池中。
浚々又潺々。水翠生暖烟。乘興忘倦脚。探花意欲顛。
沽酒柳邊宅。釣魚竹下泉。泉能洗我耳。酒能引我喜。

半歲雖離家。非是逃世士。士本不顧身。况敢思鄉里。
偷暇事行遊。老去烟波裏。

松

官舍有老松。字爾喚蒼龍。龍本百蟲長。爾亦百卉宗。
亭々凌霜雪。寂々蟠巢穴。風雲際會時。誰與爭鴻烈。
二月廿六日、釣魚虎淵、會久永郡宰至、因共汲
流泉煎茶

二月春風吹暖回。梅花已老杏花開。清流甘美泉芳冽。
酬應眞堪當酒杯。
憶昔虎淵深數仞。狂瀾恰似掃千軍。星移物替今如此。
男伴垂綸女摘芹。

送久永保次遊學河肥

客路清明風景催。野花山杏一時開。與君別後雖三日。
刮目待看業就來。濁酒三杯聊盡情。男兒固擬四方征。傍花隨柳發毛野。
弄月聞蟲在雁城。愧我多年老散地。願君他日立英名。
百般非健難成就。莫以優游了一生。

讀乍浦集詠抄

道光天子暗兵權。和議徒論交戟前。雙袖淚痕何所益。
虛仁不值一文錢。海上相銜鐵壁船。英夷殺氣掩江天。將軍防賊無奇策。
徒舉生靈付烈烟。

讀乍浦集詠有感

千里江南被賊師。堂堂中國亦憂夷。前車覆沒後車戒。

勿賴神風僥倖吹。英夷剛氣倍胡元。飛礮翻摧萬馬屯。神策縣官講得在。
書生何用費空言。

春陰

盡日烟雲暗草堂。鳴鳩呼雨到昏黃。東君好意真堪謝。
貸與春陰護海棠。

春月

濃花淡月兩相宜。影墜酒杯香滿衣。髯蘇一自定高價。
千載何人容是非。賞月四時費品評。會心不必仲秋明。金風玉露空蕭瑟。
輸與花邊柳處清。

春雪

濃雲作意釀來頻。絮舞鹽翻凍瓦鱗。點々隨風飄客袖。紛々伴月照征輪。山河此日開生面。花柳明朝有別春。準擬尋梅孤棹泛。短篷溪畔着吟身。

薄暮聽新雷、明日有行遊約

夏景清新潑眼來。遠山薄暮聽輕雷。先生卜得明朝霽。約破曉烟登梵臺。

與久永郡宰、同遊隆興寺、呈機外禪師

携筇結伴訪禪扉。四月秧田浸種時。春老鶯花覓無跡。愛看砌下小荷池。

芳筵可惜後花期。紅盡園中綠正滋。葉展池荷擎作蓋。枝垂庭柳颺成絲。香爐烟冷餘薰散。竹樹日斜疎影移。憶昔奇童真可愛。古巖書贈我貽詩。

余昔遊此座、有童子敏捷可愛、余賦一絕、令古巖錄以與矣、故轉結及之、亡友藍澤生號古巖。

觀隆興寺中、亡友古巖遺愛詩碑惻然、因次其韻

追思往事覺心寒。尤恨無君共此歡。對碑佇立淚如雨。折取懇供白牡丹。

送遠藤某遊日光山、兼浴中禪寺溫泉

平生不恨出無車。竹杖芒鞋意自舒。濁酒難消連夜夢。歸鴻須寄一封書。華巖瀑布風前碎。鬢髮峯巒月下梳。腰脚不辭攀峻嶺。白雲深處有仙居。

峻坂險途登如蛇。中禪寺畔去家賒。深山定見人別間。五月中旬六出花。

中禪寺

僕於韵語尤拙、然猶侵笑侮而作詩、偶得關壯
穆七絕、保岡先生劇賞、以為有賴山陽風、雖知
戲謔、亦不無知己之感、書以奉呈

氣吞吳魏是長城。平日目中無勁兵。萬馬叢邊則良手。
誰知秉燭到天明。

客中聞鶻

不如歸又不歸。苦向窓前來去飛。月落簷前更寂莫。
孤燈無焰雨霏微。

看書掩帙已三更。客枕悠悠百感生。往事關心眠未就。
斷雲落月子規鳴。

欲歸河肥發旣橋

竹輿出郭已天明。梅雨候中逢此晴。農事忙時蠶事鬧。

羞煩人馬向歸程。

櫛比人家一少都。市廛過盡又田區。封疆子弟皆知學。
曾聽村々有宿儒。

伊勢崎

五月中旬仍麥秋。駐轎渡口未登舟。翻々柳絮風吹起。
旋入前川浮水流。

中瀬渡口

夏日雜詠

盡日無來客。柴門晝亦幽。豆花棲蝶子。芋葉點蝸牛。
瀟洒亭邊坐。從容竹裏遊。看書吾欲倦。呼枕北窓休。

中秋對月

三五仲秋月。無雲玉宇清。西家絲竹響。東寺木魚鳴。
抱膝吟梁父。含杯樂聖明。紛々名利客。與我不同盟。

秋日手移茶梅口占、錄寄久永郡宰

兼旬逢罕霽。鋤庭種茶梅。思量定位置。鄭重密栽培。
 密葉綠映日。新花紅浮杯。移榻縱坐臥。拉筇且徘徊。
 似添三徑友。漸染半弓苔。即此心殊愜。問君何日來。

自嘲

牧子自長嘆。吾衰近六旬。萬事不能一。百年惟守真。
 行路多齟齬。險途亦逡巡。置身閑散地。裹足江海濱。
 平生蓑笠意。豈復着儒巾。

咏梅、賀柳居氏病起

造物於梅妙入神。人間百卉不同倫。飽經霜雪猶無恙。
 又得春風一段新。

人日

夜雪朝來冷。倚窓望野塘。入春纔七日。梅柳有新妝。

奉題 菅相公像

我朝文學誰為祖。菅家有志尊鄒魯。俎豆先行仰帝師。
 垂繙正笏登相府。淵源紹述二千秋。德教沾敷六十州。
 君不見。青蠅貝錦巧藥媒。我公遷謫何尤哉。
 一輪影落紫海水。千里香送舊庭梅。人傳積憤死猶怒。
 忠魂昇天化作雷。疾風暴雨捲砂至。穿屋擊仇轟帝臺。
 虛誕忘言俗所喜。慢云我公作崇來。一犬吠虛萬犬吠。
 遂令賢者蒙污穢。君子絕交無惡擊。大賢何用傷沈晦。
 紫陽老儒作史評。為公一洗解謠喙。

廐橋客舍、奉送 藤森先生遊榛名妙義諸山

四方有志是男兒。竹杖芒鞋去問奇。可識自君過二野。
 山川風物盡成詩。

雲山烟水入眸鮮。未合漫遊倦着鞭。杜宇聲々鳴不止。
客中送客更悽然。

癸丑十二月芝石燈之詞

老友方以善哉

清
彭
遺
詩

牧清彭君肖像贊並序

君名俊八、姓牧、以弘化元年十二月九日、生於川越、後藩侯封遷前橋、維新徹藩、往東郊大島村住、後遷前橋、無幾終、享年四十有九、明治二十五年一月十七日也。

世仕松平氏、君嚴父、以文學名、自幼受家學、兼通武技、風骨凌厲、志氣精銳、固有名士之稱、而時遇革變、君乃退臥田野、時出爲教師、爲里正、謂以之盡君者、未可謂識君者也、其沒亦不邇知命、天曷爲獨嗇於君、令嗣、々業醫、門戶方盛、抑又君之隱德而致然歟。贊曰

君之生也。西興東傾。運屬大變。無綱紛更。越々武夫。爰解干城。賣劍買犢。率歸躬耕。藩而自若。尙建名聲。

退伏于野。守幽人貞。時爲塾長。教育後世。時爲里長。孰化衆氓。循々其跡。深藏鋒英。人之失職。傍人不平。大塊旋轉。一枯一榮。臨筆至此。殆難爲情。幸藉名手。寫出其精。風神氣骨。今尙若生。

明治壬寅八月中浣

保岡亮吉撰

清彭遺詩

牧清彭遺著

田村東谷批閱

雪中遊山寺

六出紛々三寸深。不妨蓑笠訪禪林。只求詩句不求話。恐澆高僧塵外心。

寄送井上生隆伯三首

豫卜安危好隱醫。山家誰碍晏眠時。胸中遍屈飛龍氣。不信無爲老水涯。百歲餽羊何處僵。不憚醒促老斯鄉。遙知臭味不相似。許否結茅移子傍。晚煙繞遍幾山巔。堪賞家々綠茗煎。最羨內君熬炙手。

織成新麵壓江鱸。

讀史有感

誰拂凍雲山樣塵。清光令照曲江濱。從今休得民情喜。莫使佐公泉下嘖。

偶成二首

放疎天質有誰憐。日夕釣竿野水邊。唯怪此身猶謹飭。薄冰踐去荇深淵。清茶一碗坐霜筵。放却物心要學禪。未免工夫成業拙。愁聞媚鳥戲花邊。

讀宋史有感

拔群才學壓滿朝。終令唐呂得真聊。最憐新法勢威烈。名士無言悉屈腰。

遊某家見古刀、謂是五百年許物

一振龍化定凌濤。才脫鮫韜氣既豪。底事方今徒重寶。不令霜刃拂紅毛。

偶成五首

邦家久見偃干戈。驚彼洋夷送大舸。可恨寒濤似易水。嘗無壯士學荆軻。是々非々未必詳。三千張儀溢帝鄉。純戎固是無憎域。歸一治方似勝唐。讀經意氣若雷霆。八寸身頭不暫停。可似麻衣雲水客。踰籬闥夜惹嫖娼。人情常見趣貪婪。爭信七篇委曲談。借問更厝三萬卵。坐來能可陞江潭。

窮山絕谷作深潛。時帶寒煙耕北崦。形跡如斯雖可喜。不知胸裏有何占。

潮洋癖家

五洲四海是余家。何管胸中辨夏華。大志如今爲底事。栗頭鳥舌向人誇。

大閣入故鄉圖

天地並吞自在存。春風走馬入芳村。敢言昔日斯藤吉。漫坐草門不唱尊。

遊龍鼻河原

城外西南龍鼻隈。水波轉石響如雷。村翁說道昔時事。一葉輕舟出沒來。

寮中偶作

月上書窓梅影清。詩成東壁龍姿橫。紅花一結短檠暗。知是明朝有吉呈。

月夜歸家

柳外窓前月影斜。梅風入坐茗香加。稚兒吃々解遊事。頻覓紙紗描黑蛇。

冬雨暖甚

正識庭園春意動。郊村十里雨濛々。閑開韻譜未揮筆。唯待早梅綻惠風。

雪

滿面連山雪景奇。沒埋塵垢忽清姿。今來可取仁風比。三月魯邦布澤時。

嚴冬

颯々寒風繞九圻。瘦山荒野雪花飛。詩人也與儒生異。
無又箇中惜寸暉。

早梅

東風昨夜發寒江。僅見山村止雪降。早見梅花蒙恩澤。
離群先上小銀缸。

題松圖

老幹千尋不染塵。黑雲羃々繞龍鱗。蟠根割石矯々立。
一幅堪驚水墨新。

赤壁圖

赤壁占成千古榮。風流豈敢弄權衡。世人多見媚文墨。
不寫周郎勳績英。

寄送女屋身山莊

由來梅月雖堪弄。三百餘光何好送。掌大庭池數本蓮。
枕邊時結風流夢。

大雪有感、代妻子而賦

無情白雪全埋地。小獸小禽何處眠。不似爐頭安臥得。
一飢一凍不堪憐。

閑庭手栽野梅一株、初有花

請看一片愛君心。何啻溶々春水深。初見枝頭春信到。
羅浮仙夢繞孤衾。

君凌霜雪著花時。太勝庸儒弄指麾。借問芳香清麗氣。
嘗爲世上幾人師。

代愛犬者戲賦

飼養慈撫度幾春。深山馳逐立功新。稱揚恰利記恩強。

爲語將軍苦戰辰。

和錦城先生四情之韻

余移於此地已六年，畧見人情輕薄無賴異於故鄉，戲和太田錦城先生喜怒哀樂韻，又別賦一詩，代跋言云

不獨鮮樓弄淫聲。斑衣飛舞事權衡。人々遍賞吾儂藝。

(喜)

欣喜不禁胸裏盈。清貧好是倚山欄。嬌顏偶認檀郎失。

(怒)

貓類尙猶看海瀾。屬望早已見孩嬰。寢託寒流計後榮。偶爲陰陽時不順。

(哀)

得來疾疫傷愛情。斯風爲俗幾千春。不識儒家撫字仁。團坐論談知底事。

(樂)

滿篝合利是金銀。

移家何處擇仁鄉。良藥爲藏毫底香。千卷讀書羞耻耳。菲才不識濟時方。

弔中井先生、分韻得淹字

一畝茅宮好隱潛。即知德化遍閭閻。悼悲今日上天去。空使鄉人兩袖淹。

賀女達舉女子

父祖餘恩弄瓦來。誰論松操遍幼孩。休言雲上尤斯遠。從是兒孫滿玉臺。

冬林紅葉

九十春花美不如。滿林紅葉繞村閭。枝頭若有點香在。好結此間文士廬。

源廷尉、次春草先生韻二首

勿道雄豪乃叔風。最憐壇浦殺驚蟲。先虧一片恭虔意。
 遺憾令人泣郭公。
 踏破繽紛雪舞風。憤憤嗔殺滿顏蟲。至剛克耐焦燒器。
 招作嫌心在佐公。

冬日贈八木秀才

過了小春々未回。斯間風物沒塵埃。待他精細雕蟲技。
 早賦梅花逸韻來。

賀女屋身遜世二首

鳳雛方是繼承安。一領萊衣舞膝端。不用人間丘壑計。
 佳肴盛饒有餘歡。
 此腰暫屈入朝班。一日掛冠老太閑。最羨菟裘占好景。
 榛名山並赤城山。

初冬至五代村、途中口占

欲訪孤村出北東。飽霜籬菊午時風。山途里許不嘗倦。
 處々林梢殘赤楓。

冬夜試茗

十笏書堂容膝安。燈前獨與古人觀。倦來欲試茶三碗。
 立汲前流漾月瀾。

月下美人

嬋娟容色出風塵。帶月凝粧又更新。嬌態多情何艷麗。
 却疑狐子巧迷人。

題打稻圖

落陽寒影穗禾埃。手足凍龜凝不開。耶許時聞林外路。
 猶餘束稻滿荷來。

園中栽菊圖

勿道風流無定師。不知些事釋疑誼。園中寒菊香深處。巨傘擁來誤護持。

平內府、分韻得教

淨海專橫溢帝坳。深謀遠慮忽流泡。兩全忠孝生堪舍。却見千秋存至教。

冬日郊行

探奇郊外慰詩魔。到處村々笑語過。却覺農家耕穡苦。女兒栽麥男收禾。

冬日宿女屋村

十里桃川欲問津。茅廬結有寂寥濱。知君厚意能留我。半夜高談脫俗塵。

讀默霖上人詠菊詩有感

多少空論不可期。敢驅東虜進西夷。若令和尙今猶在。不獨秋香感慨辭。

讀興風集

唱歌一首見心真。慷慨無由安此身。西海波頭空投去。人間永作獨醒人。

隣家山茶花二首

山茶花咲東家砌。香色惹人勞所思。自笑狂癡留不止。曉鴉聲裏又偷窺。

愛花性懶未栽花。暖則郊行寒則癡。堪賞隣園寒月下。斜風一陣馥山茶。

偶成

梅花香裏結詩盟。蒲酒熟時方釣行。自笑風流閑雅癖。
終年強半是書生。

寄栗間文明二首（文明時有客舍）

千山萬水景風清。恰好此中慰客情。定有佳詩多妙句。
只慚吾輩費經營。
推敲日夕惱斯生。不許五更入睡鄉。遙羨客廬山水妙。
誘開詩思十分清。

勸舍弟寅子讀日本外史

皇運新開遍德風。休言此際敢無功。要知興敗前朝事。
須讀山陽史筆雄。

宮内生贈扇需詩書、因與

生本舊家、豪富無比、一旦有故衰矣、今時從某學

苦學多年益鑽研。希望欲逐古前賢。從今阿母須欣喜。
家勢恢弘復當全。
苦學先欣得階梯。聖賢從是事攀躋。人間到處多歧路。
須戒迷愆落曲谿。

閨怨、分韻得衾

寂々幽閨歲月深。不堪夜々擁寒衾。妾身如得化榴實。
開示多情萬戀心。

冬夜試茗二首

月影併烹茶味清。睡思澄去雅思生。竹窓三椀趺跏處。
更覺禪機脫世情。
石鼎沸來聞遠雷。沈々夜色小爐門。遙思京地春三月。
爲汝論評不恪財。

青砥藤綱二首

八百桑陰隱影垂。一朝叱責溺牛癡。救民主意吾知了。
痛罵多旋及佛師。
烏帽素袍事已足。不須隼勢滿鄉畿。當時最少犯顏諫。
遂使主君流刺譏。

晚冬偶成

殘年不許作清談。旁午市塵煩不堪。去到泉頭峙立久。
勿愆一向苦吟耽。

咏梅、寄示栗間文明

偶移寒谷絕紅塵。淡月清風只是賓。素艷冰魂將老去。
被還俗手弄香唇。

雪月圖

銀屑點枝欺白梅。雲消行雁自東來。幾重山水明如畫。
知是嫦娥遊玉臺。

送女屋兄移住於女屋村

羨君移住四周奇。即是男兒養志時。尺蠖求伸先屈曲。
宜期他日耐驅馳。

右七十餘篇、讀來而知是餘事、暫爲詩人者也、然可以伺作者忠厚性格、
兼足以察當時世風、然則附劄而存之、亦決非徒爲也。

大正十五年五月十五日

東谷仙史拜讀

清暎餘響に跋す

天の異材を生ずる豈偶然ならんや、水流の滾々たる源泉の在る有て然ると一般なり。牧清暎翁の如きも、其祖父の異材を繼承したる者と云ふべきなり。此理を以て推す時は、其子其孫も亦異材たるべきは、流水の滾々たると一般ならん。

清暎翁は資性剛直、漢籍の造詣深く、漢詩漢文に長じ、又時勢を達觀するの眼識を有す。而して治國の要は學問に在りとし、口を開けば乃ち學問を説く。翁が學問と稱する者は、六經四子にして、其他は擧て異端視したり。故に數回上書して時事を論ずるに、學問の獎勵に言及せざる事なし。當時に於ける各藩の情勢を察するに、武技以て其地位を獲得したる者は多かるも、文事以て立身出世を爲したる者は、皆無には有らざるも頗る罕れなりしを以て、何れも武技にのみ没頭し、文事を顧る者無きは當然と云ふべきなり。翁は此間に在りて盛んに學問の必要を唱道したるに徴しても、翁が尋常平凡者流に有らざりし事は知らるゝなり。

翁は藩校に學びし頃、長野豊山の教を受けられたる者の如し。其れは翁の詩稿

中豊山先生の添削に依る者あるを以て知らるゝなり。藤森天山先生とは交誼頗る篤く、天山先生が翁の詩を和韻したる註に、三十年の交友とあるに觀ても知らるべし。而して最も親炙し、最も長く教を受けたるは保岡嶺南先生なり。先生は世に所謂川越版の日本外史を校定出版せられたる人なり。故に翁は當然此先生の學統に屬すべき筈なれども、其所見聊か異なる點存する如く察せらるゝなり。

其藩政に對する上書等に依り、仔細に觀察するに、前述の如く治國の要は六經四子に存すとなし、其餘は皆排斥したるが如し。且つ漢土に於ては老莊楊墨の學說治世の害を爲すも、我國に於ては敢て大なる影響なし、我國に於て治國の害を爲す者は、神佛の學說なりと論じ、大に排斥を試みたるも、神佛の學問には遺憾ながら造詣深からざりしに似たり。殊に神道に於ては、當時既に陳腐に屬したる山崎闇齋派の神道を目標とし論じられたるも、翁の時代には既に荷田春滿、加茂真淵等の神道學興起し、眞の國學神典を説かれたるも、翁は是等の學說を等閑視せられたるは遺憾なりき。

翁は晩年藩主直侯公の傅、即ち御附き役となりたるが、直侯公は水戸景山公の第八子にして、川越藩の養子となられたるが、公は夙に水戸風を帯び、尊王の氣象在らせられたりとの事なれば、公と翁との間には意見の合致せざりし點ありし者の如く疑はるゝ事は、機微の間に髣髴窺ひ見るを得べし。翁が幕府を擁護し、國家を維持せんとするの意見を懷抱せられたるが如きは、幕府親藩の臣子として當然の事と云ふべきなり。若し翁に尊王の意思の在る有て、直侯公を中心として、風雲を捲き起しなば、關東平野に一偉觀を現出せしならん。

翁は數回上書して時事を論議せられたるも、經費を節約し、入を量て出るを制する一篇と、前橋移城の一篇とを以て其最たる者と爲す。此二上書にて翁の異材たるを知るの資料に充分なりとす。殊に學問の振興を唱道し、仁義の大道を尊崇せらるゝに於て、其人格の崇高なるを知るべきにあらずや。

終に臨み一言を費すは、翁は固より世態の激變を豫知すべくも非ず、只一藩の爲に前橋移城を唱へたる者なるも、此城ありたればこそ縣廳も設置され繁榮の基礎を爲したるに外ならず、故に前橋人たるものは宜しく翁の遺徳を銘記して、永

く忘せざらんことを要すべき也。

大正十三年立春の日

早川圭村謹識

大正十五年九月三日印刷
大正十五年九月七日發行

(非賣品)

著者
發行者
牧

震太郎
群馬縣群馬郡
金古町百九十二番地



印刷者
仁井田錠次郎

同縣前橋市
北曲輪町四十三番地

印刷所
株式會社前橋印刷所

同縣同番地
豎町百一



283
4.11

終

